

〔撮壤集〕草中 莛

〔書言字考節用集〕生六 地筋本草白茅類 萱同和名

〔東雅〕草十五 菅スゲ 茅チ 萱カヤ略 中チといひカヤといふ義不詳、萱の字の如きも、倭名鈔に

廣益玉篇を引て、草名也と註したれど、正しくカヤといふべき義とも見えず、此字また他書に見

る所もなし、日本紀に草祖草野姫とするされしは、舊事紀古事記に、鹿屋野姫と見えし所にして、

並に讀てカヤノヒメといふなり、さらば古の時にカヤと云ひしは、凡そ草を總言ひし言葉とこ

そ見えたれ、また彦波瀲武の御名の如きも、舊事紀日本紀には、鷓鴣草讀てウカヤといふ、古事記

には、鶉萱草としるして、萱草二字を引合せて、讀てカヤといふと註せり、万葉集の如きも、又刈草

の字讀てカルカヤとは云ひけり、

〔古事記傳〕五 加夜は、此卷末に、以鶉羽爲萱草とありて、訓萱草云、加夜と註せるぞ本義にて、何にも

あれ、屋萱む料の草を云名なり、略 中 芽と云一種あるも、屋ふくに主と用る故の名なり、

〔萬葉集〕十四 相聞

可波加美能、禰自路多可我夜、安也爾安夜爾左宿左寢、氏許曾己登爾氏爾思可、

〔類聚名義抄〕八 刈萱カルカヤ

〔下學集〕草下 刈萱カルカヤ

〔撮壤集〕草中 苧萱カルカヤ

〔倭訓栞〕前編六 かるかや 苧萱の義、萬葉集にも刈草と見えたり、秋にかりとりたるをいふ、かる

かやの關も、略 後世一種のかるかやといふ草あり、雀麥也といへり、夫木集に、

〔冠辭續釋〕加 かるかやのみだれ